

國學院大學学術情報リポジトリ

『明教新誌』 解題：
創刊から明治21年頃までを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000527

『明教新誌』解題 —創刊から明治21年頃までを中心に—

星野 靖二

1. はじめに

本稿は、1875（明治8）年から1901（明治34）年まで隔日刊で刊行された『明教新誌』という通宗派的な仏教新聞について、主に明治21年頃までを中心に、その基礎的な情報について整理し、検討するものである。

同紙について、その重要性はかねてより指摘されてきているものの、¹これまで十分に活用されてきているとは言い難く、またそもそも同紙の基本的な性格についても十分に検討されているわけではない。

著者は現在、科研基盤（C）「明治前期の宗教をめぐる言説空間の再検討——宗教メディアの横断的考察」（15K02059、研究代表者：星野靖二。2015～2018年度）によって全期間ではないが『明教新誌』の目次を作成してオープンな形で公開²しており、本稿はその成果をも活用して、この時期の同紙の基本的情報や正確について検討するものである。

なお、本論に入る前に、現状における『明教新誌』の利用法などについて述べておきたい。原紙については、駒澤大学図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、龍谷大学図書館などに多くが所蔵されているが、いずれも欠号があり、原紙を完全に揃えて所蔵している図書館はないように思われる。

復刻について、今に至るまで紙のものは出ていないが、2003年に高野山大学附属高野山図書館が監修する形で、ほぼ全号を収録した電子版の『明教新誌』が出されている。³これはCD-R13枚組で20万円を超えるものであり、必ずしも安価なものではなかったが、これによって同紙の利用環境は飛躍的に向上した。なお、この電子版『明教新誌』を販売している小林写真工業株式会社のウェブサイトによると、現在はデータをPDF化し、DVD2枚に収録したものを8万円（税別）で販売しているとのことである。⁴著者はこのバージョンは未入手であるが、PDF化されたことでおそらくは使い勝手も向上し、⁵かつより安価になったことで、以前よりも入手しやすくなったということができだろう。

しかし、この『明教新誌』電子版は、基本的には画像データをまとめたものであって、刊行日や号数についての情報はともかく、内容に関する目次的な情報は存在しておらず、おそらくはそれもあってこれまで必ずしも十分に活用されてきているとはいえないように思う。

前述のように著者は同紙の目次を限定的ではあるが作成し、オープンな形で公開しているが、これは『明教新誌』の更なる活用を促すという目的から来るものでもある。なお、目次作成を開始した後に、佛教大学図書館デジタルコレクションに明教新誌の目次が所蔵されていることを知ったが、⁶これは佛教大学内のネットワークからのみ接続可能なものとなっている。そのため、オープンな形で公開することに依然として公益性があると判断し、引き続き目次の作成・公開を進めている。

2. 『明教新誌』——刊行の経緯

『教会新聞』から『明教新誌』

まず『明教新誌』の前身である『教会新聞』について述べる。1874（明治7）年の、おそらくは前半⁷に、大教院はその機関誌として『教会新聞』を刊行した。大教院が「官」の組織であったこともあり、その刊行にあたっては、官によって承認されたという意味で「官准」という言葉が表紙に入っていた。

この『教会新聞』については、現存している原紙が少なく、必然的に電子版においても欠号が多い。⁸この段階では月6回の発行であり、4頁の冊子、あるいは横長の1枚紙などの体裁を取っていたようである。

2号（1874（明治7）年4月27日）によれば、編集者は中講義の西濱正熙、印務者は辻金太郎、印刷所は東京京橋銀座一丁目五番地にあった更新社であった。これは118号（1875（明治8）年4月2日）でも同様である。また、118号には代金についての記載もあり、一部一錢五厘、一ヶ月分前金で二十錢、一年間前金で二円二十五錢、それに東京外の場合には送料が追加されると記されている。

この『教会新聞』は、1875（明治8）年4月30日に134号を出して一時期休刊となるが〔川口、1996〕、同年7月12日に135号が明教社から発行される。本局となった明教社は東京銀座二丁目三番地に置かれており、また大内青巒が「編集印刷総長」として大きな役割を果たすことになる。

明教社はそのまま同年8月5日発行の147号まで『教会新聞』という名前で刊行を続けたが、8月7日発行の148号において、通算号数をそのまま使用して『明教新誌』に改題する。

改題の理由として、明教社が『教会新聞』を引き受けた段階で大教院の機関誌であった『教会新聞』とは性格が異なる新聞になったが、同じ名前を使い続けることは誤解をまねくおそれがあるためであると述べられている。大内は「弊社〔＝明教社〕の目的とするところは全く明教の二字」であり、『明教新誌』は「仏教純一に各宗普通の新聞」を目指すものであるとし、同紙を「仏教弘通の汚隆をトするの要具」としてほしいと述べている。⁹

その後の明治20年頃までの展開については後段に譲るが、最終的には1901（明治34）年2月28日に発行された4603号において終刊を宣言し、『日出新聞』に合併する形となった〔川口、2000〕。

先行研究

この『明教新誌』について、先行研究では一般に大内青巒との関係が指摘され、その延長線上において啓蒙的・開明的な側面を持つ新聞であると評されることが多い。

例えば柏原祐泉は「大内青巒はまた八年（一八七五）七月、「明教社」を結んで新聞『明教新誌』を刊行し、仏教精神と開化主義的な自由平等思想および国家主義との結合をはかって、仏教の時代的自覚を促すことに刺激を与えた」とし〔柏原、1990:60-61〕、池田英俊は「〔大内〕青巒は、仏教界への啓蒙活動を、毎月十五回発行の『明教新誌』を通して行っている。その内容は、全国各地の仏教の時事的情報の提供と、広報活動、教部省関係の『官報』記事の掲載、仏教各宗派教団の『録事』、政教問題の評論、教理・法語・宗教論などの広範囲に及んでいる。それだけに仏教の内外に与えた影響もまた極めて大きいものがあったといえよう」と述べる〔池田編、1997:57〕。¹⁰

これに対して、高岡隆真〔2005〕は、同紙の内容を検討しながら、大内青巒という一個人以外に目を向ける必要性を示唆しており、川口高風〔1996～1997;2000〕は曹洞宗史のような側面から同紙を活用しうることを示している。いずれも、首肯できる指摘であると考えられる。

3. 『明教新誌』：基本事項の確認

以下、『明教新誌』の性格を主に明治20年代頃までに焦点を合わせて見ていく。同紙の誌面構成などを概観し、同紙に関わっていた人物や、また既存の各宗派との関わり等を検討する。

誌面構成

8頁時代（135号（※『教会新聞』）：1875（明治8）年7月12日～2118号1886（明治19）年11月30日）

まず誌面構成について、明教社が発行を引き受けた『教会新聞』135号（1875（明治8）年7月12日発行）から、『明教新誌』に改題された148号（1875（明治8）年8月7日発行）を経て、2118号（1886（明治19）年11月30日発行）まで、すなわち1875（明治8）年頃から1886（明治19）年頃にかけては8頁で刊行されている。

この時期、号によって掲載の有無は異なるものの、基本的に「官報」、「公報」、「録事」、「報告」、「論説」あるいは「普説」¹¹、「雑報」、「寄書」、「広告」等の諸欄から構成されており、雑報の前後に詩文が入ることもあった。例えば、この時期の紙面の典型的な構成は、冒頭1～2頁に「官報・公報・録事・報告」欄、3～4頁に「論説・普説」欄、5～6頁に「雑報」欄、そして7頁に「寄書」欄、8頁に「広告」欄というようなものである。

それぞれの欄について、まず録事、報告欄は、各宗派からの連絡、通達事項、あるいは報告すべき事柄などが載せられている。この宗派別の件数については後述する。

次に、「普説」欄について、これは論説のための欄であり、無署名のものと署名のものがある。1879（明治12）年から1886（明治19）年までの期間中（後述のように1886年末に「普説」欄は「新誌」欄に統合される）、累計で883本の「普説」があり、うち610本が署名論説であった。無署名のものの中には明教社の社主である大内青巒の手になるものも含まれているはずだが、現状では同定できていない。なお、大内の署名付きの「普説」もある。他の執筆者については後述する。

「寄書」欄は投書など、明教社に寄せられた文章を掲載する欄である。掲載に際して、もちろん編集側で取捨選択していたことが想定されるが、選択基準については記載が無い。しかしながら、『教会新聞』の発行元が明教社に切り替わった段階で編集側から「條例にふれた者と編輯者が責に任しかねる愚論とを除の外は決して御断はりしは申さぬゆへ日本の伝教師方も追々有難き御投書を沢山御投じ下さる様にと社中一同祈て居ります」（『教会新聞』135号、1875（明治8）年7月12日）という文章が掲げられている。

関連して、寄書欄を示す柱のところに「説の可否真偽は吾輩之れを保証せず」と記されており、編集側は広く（あるいは無責任に）投書を掲載していた、ともいえることができる。なお、普説や寄書として掲載された文章に対して、別の寄書で質問や批判が寄せられ、場合によってはこれに更に寄書欄で応答するという形で論争が行われるような事態はよく見られる。

「雑報」欄は、各地の時事を伝える記事や、あるいは他の新聞雑誌からの転載や要約など様々な内容が含まれている。特にこの時期は、各地の仏教結社の活動を伝える記事が多く掲載され、またキリスト教の動向に注意を払っている様子も窺われる。

12頁時代（2119号：1886（明治19）年12月2日～）

特に告知などは見あたらないが、2119号から体裁が12頁になっている。「官報」・「録事」・「寄書」・「広告」などの欄には変更が無いが、変化した点として「新誌」という欄が新設され、これに普説欄と雑報欄が統合された。例えば、井上円了「東天童氏の質問に答へ併せて矢野文雄氏の宗教論を評す」の初回は「普説」欄（2110号、1886（明治19）年11月14日）に掲載されているが、後に「新誌」欄に掲載されている。¹²

紙面上では新誌欄の中の論説の部分と雑報の部分の間に飾り線が入って区切られていることもあるが、両者共に欄としては新誌に含まれることになる。なお、論説的なものが無い場合には、新誌欄は雑報のみが掲載されることになる。

寄書欄について、その採用基準については変わらず記載がないが、一度掲載した寄書の続編が不掲載になった事例を一つ紹介しておく。まず2125号（1886（明治19）年12月14日）に、黄檗宗の僧侶である和田泰洲による「黄檗宗の当路者に歎願す」という寄書が掲載された。これは、本山と末寺の関係が、あたかも地頭と領民の関係のようになってしまっていて、これは穏当ではないとし、黄檗宗の宗会を開催して「本末の間を調和」し、「弊風を脱却して改良の方法を講ずる」べきであると述べるものであった。

そのしばらく後、和田泰洲は西尾謙道と連名で「黄檗闔宗僧侶諸氏に問ふ」という寄書を2403号（1888（明治21）年7月26日）に寄せている。これによると寄書した和田と西尾は黄檗宗の元僧侶であり、1887（明治20）年に黄檗宗の宗会（「大会議」）開設をめぐって本山と衝突し、僧籍を返上したと記されている。その後、黄檗宗の宗会議がうまく運営されていないことをこの寄書で批評するとし、末寺側の大谷黙了らが本山の方針に不満を表明して退場したことなどに言及している。ここで和田・西尾は明らかに本山側の姿勢に対して批判的な態度を取っている。

この寄書は2403号では未完であり、当然続編の掲載が想定されていることになるが、2406号（1888（明治21）年8月2日）に不掲載を告げる以下のような文書が掲載される。

没書 和田泰洲西尾謙道両氏の寄稿にかゝる「黄檗闔宗僧侶諸氏に問ふ」と題せる一篇は続々掲載すべき處文中頗る誹毀に渉りたる字句有之止むを得ず未載の分没書とせり因て寄稿者並に読者諸君に御断申すこと如比

この時期、教団に対して建白するような寄書は珍しいものではなく、また論説や他の寄書についての批判や反論も、大内青巒への批判を含めてしばしば掲載されていたため、批判そのものが問題とされたと考えることは難しい。特にこの寄書が不掲載となった背景として、単に「文中頗る誹毀に渉りたる字句」があったためであるか、あるいは外部から編集側に何らか働きかけがあった可能性もあるが、いずれにしても紙上の記述からはこれ以上窺い知ることとはできない。この間の事情を明らかにするためには、今後別の資料を見る必要があるだろう。

関連人物

次に、1889（明治22）頃までについて、紙上に記載されている発行に関わる人物を、肩書きと共に列記する。

表1 『明教新誌』 関連人物

開始時期	終了時期	肩書／人物名
1875（明治8）年 4月30日	1876（明治9）年 9月1日	編輯印刷総長 大内青巒
1876（明治9）年 9月3日	1876（明治9）年 9月13日	編輯印刷総長代理 森貴之
1876（明治9）年 9月5日	1876（明治9）年 11月28日	編輯印刷総長代理 藤田祐真
1876（明治9）年 11月30日	1877（明治10）年 10月10日	社 長 大内青巒 編集人 八起（磯部）克 印刷人 林徳之助
1877（明治10）年 10月12日	1880（明治13）年 7月4日	社 長 大内青巒 編集人 藤田祐真 印刷人 林徳之助
1880（明治13）年 7月6日	1883（明治16）年 5月14日	社 長 大内青巒 編集人 藤田祐真 印刷人 大田正隆
1883（明治16）年 5月16日	1889（明治22）年 9月30日	持主兼印刷人（発行人兼印刷人） 宏仏海 社 長 大内青巒 編集人 藤田祐真

このように見ると、同紙の発行にあたって関わりが深かったと考えられる人物として、大内青巒・藤田祐真・宏仏海といった名前を挙げるができる。

なお、表1の最後の段（1883～1889）に「持主兼印刷人」あるいは「発行人兼印刷人」として名前の出ている宏仏海¹³は、398号（1877（明治10）年1月4日）の「論説」の中に「明教社会計長 宏仏海」という記載があり、初期から関与していた。しかし、署名記事は一本もないため、明教社には組織運営や資金調達等の面で関わっていたことが想定される。

関連人物による回顧

当事者による回顧として、1000号刊行の際に、無署名ではあるが大内の手になる記念記事が出されている。

- ・大内青巒（無署名）「本誌発兌到一千号」普説1000号（1880（明治13）年6月26日）
- ・大内青巒（無署名）「本社の沿革」普説1001号（1880（明治13）年6月28日）
- ・大内青巒（無署名）「本誌の述意」普説1003;1004;1006号（1880（明治13）年7月2日;4日;8日）

他方、2000号刊行の際には、大内はごく簡単な文を寄せるに留まっており、2001号には蘆津実全が「発刊明教新誌第二千号記事」を寄せている。

- ・大内青巒（藹々居士述）「本誌発行第二千号に至れり」普説2000号（1886（明治19）年4

月2日)

- ・ 藤田祐真「本社の新誌を発行する其業を明治八年の夏交に起し…」普説2000号(1886(明治19)年4月2日)(※大内の普説に続けて事実関係の補足など)
- ・ 蘆津実全(石蓮 蘆津実全)「発刊明教新誌第二千号記事」普説2001号(1886(明治19)年4月4日)

これは、大内の関与が相対的に少なくなっていたことの傍証といえるかもしれない。

発行部数

発行部数に関する情報をまとめておく。まず、明教社が『教会新聞』を引き受けて発行し始めた1875(明治8)年頃の発行部数は「僅々数百」であったが、1877(明治10)年頃にはその6～7倍、「数千部の発行」となったと宏仏海は回顧している。

去る明治八年七月十二日嘗て旧大教院に於て発行せし教会新聞を已に廃絶したるに繼興し我社に於てその第百三十五號を刊行せし當時に在ては新誌を発売するの数は僅々数百のみなりしに未た一ヶ月に足らずして追々看者の多きを加ふるを覚へ益／＼盛大ならんとするの勢はひあるを以て社中大ひに之を喜悅し終に同年八月七日第百四十八號より題號を改ためて明教新誌と為すに及ひたりしに其れより以来今年今日第三百九十八號の本誌に至るまで號数既に二百五十を繼ぎ居諸漸く一年五ヶ月を経たり

[…中略…：府県別、宗派別(後述)の概要]

合して僅々数千部の発行なりと雖も之を再興の初めに比すれば殆んど六七倍の多きに至れり且つ昨年よりは支那英国及び米国等の諸邦まで多少之を郵送するに至りし者はこれ実に諸宗碩徳の保助と看官諸君の愛顧とに依て此盛大を致すなり

(398号：1877(明治10)年1月4日号「論説」欄。明教社会計長 宏仏海による記述)

これに関連して、具体的な部数は記されていないが、同じく宏仏海が府県別の郵送数の順位について下記のように述べている。¹⁴

表2 『明教新誌』府県別郵送数順位(1877(明治10)年1月)

順位	府県名	比率
1	東京	30
2	京都府	7
3	愛知、千葉	
4	静岡、兵庫、新潟、石川、山口	
5	三重、広島、長野、岡山、山形、大阪府	
6	福岡、神奈川、茨城、長崎、滋賀、開拓使、宮城、秋田、島根	
7	愛媛、福島、岐阜、埼玉	
8	群馬、大分、橡木[栃木]、熊本、界[堺か]、青森、鹿児島、和歌山	
9	山梨、岩手、高知	1

まず、読者は東京が中心であり、2位の京都の4倍以上の数が東京に送られていたのを見て取ることができる。他方で、部数はともかくとして日本各地に送付されていることも見て取ることができる。

同じ記事で、続けて宗派別の郵送数が下記のようにまとめられている。¹⁵

表3 『明教新誌』宗派別郵送数順位（1877（明治10）年1月）

順位	宗派名	比率
1	真言宗	60
2	曹洞宗	
3	真宗	
4	浄土宗	
5	日蓮宗	
6	天台宗	
7	臨済宗	
8	時宗	
9	融通念仏宗	1

まず、真言宗・曹洞宗・真宗・浄土宗という上位四宗派について、後述する「録事」・「報告」欄に取り上げられている宗派別の投稿件数の順番と同じになっている。経年変化については不明だが、初期の段階で読者が多いことが想定される宗派が、より多く「録事」・「報告」欄に取り上げられているということができる。

また、各宗派の寺院数と比較して見た場合、やや後の情報だが明治19年段階で寺院数が多いのは上から順に真宗・曹洞宗・真言宗・浄土宗という順番であり、以下臨済宗・日蓮宗・天台宗と続いている。¹⁶

表4 宗派別寺院数・僧侶数（1886（明治19）年段階）

宗派	寺院	僧侶
真宗	20,678	25,499
曹洞	13,742	15,250
真言	11,274	8,186
浄土	8,302	8,929
臨済	6,323	5,891
日蓮	5,309	5,153
天台	4,635	4,311
黄檗	648	245
時宗	489	361
融通念仏	357	291
法相	25	10

このように、寺院数についていえば、真宗各派を合計した数字が抜きんで多いのに対して、

『明教新誌』の郵送先としては、真宗が最も多いわけではなかったということが示された。もちろん、郵送数と寺院数の集計時期のずれについても考えられなければならないが、少なくとも『明教新誌』が真宗を中心とした新聞ではなかったということは言えるように思われる。かねてより明治以後の仏教界における真宗の存在感の大きさが指摘されてきているが、少なくともこの時期の『明教新誌』については、これはあてはまらないことになる。

もう一点付け加えておくと、この記事において、同紙の郵送先が宗派はともかくとして仏教寺院であることは前提とされているように見える。逆に言えば、寺院に関わりを持たずに「仏教」そのものに関心を持つというような読者の存在はこの段階では想定されていない。明治20年代以降、理念的な、あるいは抽象的な「仏教」を論じる仏教知識人が出現することになるが、この時期の『明教新誌』においては、既存の宗派、すなわち既存の寺院や僧侶と切り離されたところにおいて「仏教」を考えるというような営みは基本的に見られないように思われる。その意味で、この時期の『明教新誌』については、教派を超えたところに想定される「通仏教」を取り扱っていたわけではなく、むしろ「諸宗派協同」、すなわち宗派の存在を前提として、その協力・協同を促進しようとする新聞であったとする方が、より妥当であるように思われる。

次に、少し時代を下って1888（明治21）年の配布数を見ておきたい。¹⁷

表5 新聞雑誌配布数、宗教系を中心に抜粋（1888（明治21）年12月での届出数）

新聞雑誌名称	度数	東京府下	各府県	在外邦人	外国人	計	1号あたり
明教新誌	15	1,425	25,947	-	-	27,372	1,825
日蓮宗教報	5	1,600	40,824	6	-	42,430	8,486
曹洞扶宗会雑誌	1	302	8,033	13	-	8,348	8,348
日本国教大道叢誌	1	359	5,344	-	-	5,703	5,703
日本之教学 ¹⁸	1	2,028	984	-	-	3,012	3,012
喜の音	1	359	844	-	1,439	2,642	2,642
基督教新聞	4	1,842	2,695	73	48	4,658	1,165
令知会雑誌	1	152	772	1	-	925	925
能潤新報	1	50	697	1	-	748	748
聖書之友月報	1	100	484	-	-	584	584
天主之番兵	1	77	274	-	60	411	411
教学論集	1	125	273	-	-	398	398
正教新報	2	128	540	-	-	668	334
国民之友	2	12,671	13,256	30	-	25,957	12,979
日本人	2	11,118	1,074	12	8	12,212	6,106
やまと新聞	25	469,863	89,992	130	-	559,985	22,399
読売新聞	26	296,652	33,304	130	260	330,346	12,706
時事新報	31	175,968	154,488	3,989	553	334,998	10,806

上記の表は、『官報』から主に宗教新聞・雑誌を中心に抜粋したものである。比較のため、『国民之友』・『日本人』のような一般雑誌、また『やまと新聞』・『読売新聞』・『時事新報』のよ

うな一般新聞の数値も引用している。

明教新誌は毎月累計で2万7千部配布されており、隔日刊であるために頻度が15回と多く、1号あたりの配布数は2千部弱となっている。『令知会雑誌』¹⁹・『能潤新報』²⁰・『教学論集』²¹などの、同時代における通仏教的な雑誌よりも部数が多く出ているが、性格が同じではないため、単純な比較はできないだろう。ただし、『日蓮宗教報』や『曹洞扶宗会雑誌』のように、特定の宗派と関係のある刊行物の配布数の方が多いのは明らかである。これらについては今後更なる検討が必要であると考ええる。

4. 『明教新誌』の執筆者達

本節では執筆者について検討する。まず、欄を問わず全ての署名記事から執筆者情報を抽出し、その数をまとめた（次頁参照）。可能な限り表記揺れの統一を行い、また判明している範囲で筆名の同定も行ったが、あくまで暫定的なものである。しかしながら、全体的な傾向を見て取ることができるだろう。

累計

まず署名記事の数が多い順に蘆津実全²²、養鷗徹定²³、井上円了、大内青巒の名前が挙がり、以下、実相円隋、伊藤楓堂、南條文雄、牧野再龍、嵩俊海、中村忠直と続く。

寄稿の時期と内容について、蘆津は1881（明治14）年頃から継続的に寄稿しており、そこには高橋吾良の仏教批判論に対する反駁なども含まれている。この高橋と蘆津に加えて他の論者も関わった論争については以前論じた〔星野, 2007〕。養鷗は今回集計した期間中、継続的に寄稿しているのを確認できる。

これに対して、円了の署名記事の初投稿は1884（明治17）年10月²⁴と蘆津や養鷗と比べて遅いが、後に『真理金針』や『破邪新論』としてまとまる論説を「普説」・「新誌」欄に集中的に連載しており、例えば1886（明治19）年には83本を寄稿している。

このように見るならば、円了はともかく、蘆津と養鷗はある程度継続的に寄稿しているといえることができる。大内青巒が『明教新誌』の発行に際して大きな役割を果たしていたことには疑いが無いが、しかし同紙の性格をそのまま大内青巒個人の思想を表すものとして論じることとはできないように思われる。

欄別の概観

「普説」欄

次に、欄別に署名記事の執筆者を見ておきたい。まず「普説」欄について、署名記事が多い順に井上円了、蘆津実全、大内青巒、実相円隋となる。前述のように、円了の寄稿はほとんどが後に『真理金針』などにまとめられる論説の連載である。また、全体の3割程度を無署名記事が占めている。

「寄書」欄

「寄書」欄について、署名寄書が多い順に伊藤楓堂、中村忠直、柘寛雄、寺田福寿、柳汀生となっているが、同欄への執筆者の累計が1348名であるのに対して、投稿数が5本以下の者が1248名で、96%を占める。繰り返し投稿する者の数が限定的であったのを見て取ること

別表1 『明教新誌』署名記事執筆者一覧
(1879(明治12)年～1888(明治21)年)

累計総数	4551
蘆津実全	156
養鷗徹定	133
井上円了	131
大内青巒	91
実相円随	63
伊藤楓堂	58
南條文雄	53
牧野再龍	49
嵩俊海	42
中村忠直	41
福田行誠	33
柘寛雄	33
佐治実然	33
吉堀慈恭	32
伊東洋二郎	25
寺田福寿	24
柳汀生	22
安藤光闡	20
櫟智蔵	19
村上泰音	18
青鹿秀栄	18
桑宜勲	18
林道円	17
田中格禪	17
林古芳	16
島地黙雷	16
嵩古香	15
山中杉堂	15
鳴鶴	14
小栗栖香頂	14
相馬勁堂	13
加藤正廓	13
木下月笑隠士	12
牧野韶玄	12
豊岡良振	12
塗毒鼓	12
清水亨	12
進藤端堂	12
秋野孝道	12
靈宗峯	11
陸鉞巖	11
藤田祐真	11
村松良寛	11
協日照	11
安分堂主人	11

円学生	10
鳴鶴生	10
鳴瀬一秀	10
藤原日迦	10
中村正直	10
新居日薩	10
花岡道光	10
以下省略 (9本以下=1878名)	

「普説」総数	883
無署名	273
井上円了	126
蘆津実全	104
大内青巒	69
実相円随	48
佐治実然	19
桑宜勲	17
山中杉堂	15
南條文雄	13
福田行誠	11
藤田祐真	10
玄同居士	9
笠原研寿	8
記者	8
島地黙雷	8
編者	8
明教記者	8
養鷗徹定	6
加藤正廓	6
白隠慧鶴	6
土宜法龍	5
新居日薩	4
円庵老人	4
以下省略 3本=8名 2本=19名 1本=36名	

「寄書」総数	2392
伊藤楓堂	57
中村忠直	37
柘寛雄	30
寺田福寿	24
柳汀生	22
伊東洋二郎	19
櫟智蔵	19
田中格禪	17
村上泰音	16
林古芳	16
実相円随	14
鳴鶴	14
秋野孝道	12
進藤端堂	12
南條文雄	12
牧野韶玄	12
木下月笑隠士	12
花岡道光	10
清水亨	10
藤原日迦	10
豊岡良振	10
鳴鶴生	10
陸鉞巖	10
靈宗峯	10
因幡善瑞	9
松山如庵	9
上田照遍	9
青鹿秀栄	9
塗毒鼓	9
安分堂主人	8
村松良寛	8
竹川弁中	8
K. T.	7
小帆楼主人	7
浅野義順	7
豊国義孝	7
以下省略 6本=15名 5本以下=1297名	

※上記の数値は暫定的なものであり、筆名の同定など、今後の調査の進展に伴って、変更される可能性がある。

ができる。

5. 『明教新誌』と宗派

既に宗派別の郵送数については確認したが、紙面での取り扱いという点から宗派との関係を見ておきたい。

「録事」・「報告」欄の検討

1879（明治12）年から1888（明治21）年にかけて、「録事」・「報告」欄に掲載されている記事について、その宗派別の数字を出した（次頁参照）。残念ながら1886（明治19）年12月から1887（明治20）年8月にかけて「録事」欄の表記法が変わっているため、この間の106号分については集計できていないが、それでも全体の傾向は見てとることができるだろう。

なお、宗派内の内訳について、例えば真言宗については以下のようにになっている。まず「真言宗報告」（224件）、「真言宗録事」（212件）のように真言宗全体を取り扱うものがあり、他に「真言宗新義派録事」（62件）、あるいは「智山録事」（45件）、「豊山録事」（41件）のように各派についての記事もある。また、「高野山大学林報告」（13件）のように関連する教育機関や、「智山護法会報告」（12件）のように宗内の結社についての報告事項なども掲載されている。

今回はこれらの内訳については省略し、12の宗派としてまとめた。²⁵宗派別に見ると、真言宗（881）、曹洞宗（761）が多い。以下真宗（314）、浄土宗（311）、臨済宗（252）、日蓮宗（201）、天台宗（199）が続き、黄檗宗（96）、時宗（30）、融通念仏宗（5）となる。

この数値の全体の傾向について、既に見たように1877年段階の宗派別の郵送数が真言宗、曹洞宗、真宗、浄土宗の順であり、これは変わっていない。同様に真宗は寺院数に比して『明教新誌』上での情報が少ないことが窺われるが、例えば真宗大谷派は早くから独自の機関誌を出している²⁶というような事情もあるので、今後それぞれの宗派の出版状況を見ながら考察を加えるべきであろう。例えば、日蓮宗の年別推移を見ると、1879（明治12）年が50件、翌年が35件であるが、以後30件を超えることはない。これについて『妙法新誌』（1880～1884）や『日蓮宗教報』（1885～1889）が出されていることの影響を想定できるが、これについても今後の検討課題となる。

いずれにしても、特にこの時期の『明教新誌』はそれぞれの宗派の歴史と切り離して考えることができない面があり、これまでの宗派史の積み重ねと付き合わせて考えていく必要がある。またそれによって、それぞれの宗派史に何らかの貢献をなし得るのではないかと考えている。

6. おわりに

以上、本稿では『明教新誌』について、その基礎的な情報を中心に概観した。紙幅の関係もあって、論説や寄書の内容の検討まで進むことはできなかったが、逆に言えば本稿はその準備作業としての性格を持っている。最後に、今後展開しうる論点を幾つか示しておきたい。

まず、本稿で取り上げた期間を通して、紙上に仏教の改良を訴える記事が一定数見られる。時期的には管長の権威が再確認された1884（明治17）年²⁷以後特に増えているが、それらは仏教の現状に何らかの不満を抱き、より良い仏教へと変わっていくべきことを訴えている点

別表2 『明教新誌』『録事』・「報告」欄宗派別集計・年別推移（1879（明治12）年～1888（明治21）年）

号数	2-335	336-636	637-972	973-1380	1381-1732	1733-2046	2047-2389	2390-2740	2741-2949	2950-3272	
明治	明治12	明治13	明治14	明治15	明治16	明治17	明治18	明治19	明治20	明治21	
西暦	1879	1880	1881	1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	総計
真言宗	60	69	107	106	98	80	74	135	32	120	881
曹洞宗	54	70	60	83	105	90	117	72	38	72	761
真宗	71	46	40	29	24	14	4	46	16	24	314
浄土宗	57	19	43	50	32	19	38	23	6	24	311
臨済宗	23	20	24	31	24	18	31	29	15	37	252
日蓮宗	50	35	11	13	23	30	16	12	0	11	201
天台宗	6	11	20	59	21	15	31	14	5	17	199
黄檗宗	0	12	15	15	11	16	3	4	3	17	96
時宗	0	4	3	2	8	0	12	0	1	0	30
融通念仏宗	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	5
法相宗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
華嚴宗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
年別総数	324	286	323	388	347	282	326	335	117	322	3050

※1887（M20）年の件数について補足：1886（M19）年12月2日（2119号）から1887（M20）年8月6日（2235号）にかけて、「録事」欄の表記が変わっており、この時期の106回分の「録事」（1回に複数の宗派の「録事」が掲載されている可能性がある）については集計できていない。

※「録事」・「報告」欄には、明道協会の録事・報告（47件）や福田会の録事・報告（15件）なども含まれているが、この集計には含んでいない。
 ※宗派について、「維新期の教団仏教は教部省令で天台宗・真言宗・浄土宗・臨済宗・曹洞宗・黄檗宗・真宗・日蓮宗・時宗・融通念仏宗・法相宗・華嚴宗の一二宗」（吉田, 1998:82-83）とあるのに依った。

において、明治中期以降の仏教改良運動²⁸に繋がることになる流れであると、ひとまずは考えることができる。このように見るならば、それらの諸記事を検討することで、明治中期以降の仏教改良運動の展開を明治10年代からの連続性において考察することが可能になるのではないかという将来的な展望があるが、しかしその際に両者間の違いについても目が向けられなければならないだろう。

例えば、この時期の『明教新誌』上の諸記事をもう少し細かく見ると、「宗門」や「寺門」の改良を目指したり、あるいは「宗規改良」や「宗制改革」を訴えたりする論説や寄書が多くあり、あるいは教団への建白書が掲載されている一方で、より抽象的に「仏教」を論じるような記事はそれ程掲載されていない。端的な例として、明治中期以降の仏教改良運動においてスローガンのように掲げられる「新仏教」という語が、ほとんど見られないのである。²⁹

明治中期以降の仏教改良運動の展開の中には、例えば後に『新佛教』上で論じられていくように教団や僧侶、あるいは寺院や儀礼等といったものを必ずしも必要としない——場合によっては積極的にそれらを否定する——「仏教」に帰結するものがあることになる。しかし、この時期の『明教新誌』についていえば、そのような知的で抽象的な「仏教」につながるような芽が無いわけではないとしても、社会的存在である教団と寺院、そして僧侶との関係において捉えられる「仏教」に規定されている——あるいは束縛されている——面が強いように思われる。

しかし、これを単純に教団中心の「仏教」を改良する議論から、より知的で抽象的な「仏教」の改良論に移行していくという図式で捉えるのは誤っているだろう。おそらくは多様な「仏教」の改良論と改良運動の層が積み重ねられていくのであり、それらを重層性・複合性において捉えることが、今後展開しうる論点の一つであると考ええる。

また、キリスト教との関わり、具体的にはキリスト教理解やキリスト教観の変遷、また仏教とキリスト教の比較についての議論等も興味深い論点であるが、これについては別稿を準備している。

参考文献

池田英俊『明治の新仏教運動』吉川弘文館、1976

池田英俊編『図説・日本仏教の歴史・近代』佼成出版、1997

上野康弘「『明教新誌』所収・明治十二年真言宗本末共同会議傍聴録についての一考察：翻刻・注記を中心として」『高野山大学密教文化研究所紀要』27、2014、pp.69-97

小川功「リゾート開発に狂奔した"投資銀行"のリスク増幅的行動：平松銀行頭取平松甚四郎のリスク選好を中心に」『彦根論叢』390、2011、pp.78-90

柏原祐泉『日本仏教史・近代』吉川弘文館、1990

川口高風「『明教新誌』における曹洞宗関係記事（一）～（六）[明治八年七月～明治十年十二月]」『愛知学院大学教養部紀要』44（1）～45（2）、1996～1997

川口高風「『明教新誌』と『日出新聞』合併の過程」『愛知学院大学教養部紀要』48（2）、2000、pp. 176-161

川口高風『明治前期曹洞宗の研究』法蔵館、2002

高岡隆真「『明教新誌』の性格とその変遷」『印度學佛教學研究』53（2）、2005、pp. 514-516

中西直樹・近藤俊太郎編著『令知会と明治仏教』不二出版、2017

星野靖二「明治十年代におけるある仏基論争の位相——高橋五郎と蘆津実全を中心に」『宗教学論集』26、

2007、pp.37-65

三浦節夫「井上円了の『真理金針』について（その一）」『井上円了センター年報』18、2009、pp. 77-99

吉田久一『近現代仏教の歴史』筑摩書房、1998

『明教新誌』目次（β版）<http://goo.gl/xFXwUn>

※本論文は科研基盤（C）[15K02059]「明治前期の宗教をめぐる言説空間の再検討——宗教メディアの横断的考察」の研究成果である。

注

- 1 例えば池田英俊は「『明教新誌』は、今も、なお近代仏教の抱える問題を探るうえで、重要な資料として多くの注目を集めている」と述べている〔池田編、1997:57〕。
- 2 『明教新誌』目次（β版）として、2018年9月1日現在、748号（明治12年1月4日）から2478号（明治21年12月28日）まで、全33,491項目の目次を公開している。概要については <http://goo.gl/xFXwUn> 参照。目次本体（google spreadsheetにて公開）については <https://goo.gl/QTHFtL> 参照。
- 3 <https://www.koyasan-u.ac.jp/library/publications/disk/07/> 参照。
- 4 <http://www.ksk-jp.com/publication/meikyo/meikyo.htm> 参照。
- 5 CD-R版の『明教新誌』は10年以上前に出されていることもあり、閲覧のために使用されているAlchemyというソフトウェアの使い勝手は、ユーザーインターフェースを含めて良好であるとは言い難い。また関連して、動作環境はWindows XPまで対応しているとされているが、その後の更新はなされていない。現状では、例えばWindows 7や10のような保証されていない動作環境でも使用することができているが、理論的には閲覧できなくなる可能性があるということでもある。これは、資料を電子化して復刻するときに、どのような形式で行っておくべきなのか、ということにも関係してくるだろう。
- 6 <https://bird.bukkyo-u.ac.jp/collections/?collection=meikyoshinshi> 参照。
- 7 現在のところ『教会新聞』の創刊号は所在が確認されていない。2号は4月27日付で刊行されている。なお、池田英俊は創刊を2月1日とするが、典拠は不明。
- 8 前述の電子版には、2号～34号（14号欠）と118号が収録されている。
- 9 改題の理由について述べている広告：「本社広告 弊社新聞改正発兌の後未だ期日に満たざれども四方の愛顧日に加はり自他の幸福また之に過ぐるなし然るに社中大に謀る所あり明後七日刊行第百四十八号より更に明教新誌と改題し全く旧面目を一洗し了り盛に斯教の振興するを期せんと欲す江湖四方の君子愈以て愛顧を垂れ我社新聞の盛衰を以て仏教弘通の汚隆を卜するの要具となさしめ玉は、幸い甚し」『教会新聞』147号。

また改題された号での告知：「本社広告 旧合併教会の新聞を弊社にて譲り受け用紙の体裁より編輯の目的まで盡く旧の態を一洗し仏教純一に各宗普通の新聞となせしより江湖の愛顧も日にまし加はり自他の慶幸これに過ぐるものなし然るに題號のみは矢張旧のままにして教会新聞と名け来りしが一体この新聞を教会新聞と名けしは当時神仏合併の教会なる大教院にて発兌せしゆへなりしに既に弊社へ譲り受けし上は弊社は一箇の書林にて固より教会にあらざるはいふまでもなきことなれば弊社にて発兌する新聞を旧のままに教会新聞と名けおくは名と実と甚はだ相応せず然のみならず世の人々には教会新聞の再興なりしを見てまた／＼合併教院再興せしことの様に思ひ誤るも多きよし然る疑がひの起るは実に尤もなることなり且弊社の目的とするところは全く明教の二字にして如何にもして斯教義の世に明らかならんことを期するより外なければ断然本日よりこれを明教新誌と改題せしなり伏て望むらくは江湖の君子この明教の二字を以て目印となしよ／＼愛顧を垂れたまはんことをこれ我々が明

教新誌の盛衰を以て仏教弘通の汚隆を卜するの要具となしたまへといふ所以なり謹んで白す」『明教新誌』148号。

- 10 なお、池田英俊は「異安心家を擯斥すへし無安心家を如何せん」という「新誌」欄の論説を引いて、信教自由と関連して大内青巒に「初期の開明思潮から脱皮しようとする努力がみられた」と評しているが〔池田, 1976:164〕、この論説の著者は大内ではなく佐治実然である（『明教新誌』2298号～2313号中5回。1887（明治20）年12月12日～1888（明治21）年1月16日）。
- 11 「論説」欄が「普説」欄に切り替わったのは659号（1878（明治11）年6月20日）であるが、この切り替えについての告知は見つけられなかった。
- 12 この一連の論説は全7回（2110;2111;2113;2116;2119;2120;2124）で、1～4回までは普説欄、5～7回は新誌欄に掲載されている。
- 13 宏仏海については未詳。なお、1894（明治27）年に僧侶・寺院を対象とする保険会社「明教保険」の初代社長となっている〔cf. 小川, 2011〕。
- 14 「本誌の諸府県下に郵送するの数は府下を以て第一等とし京都府第二、愛知千葉第三、静岡兵庫新潟石川山口第四、三重広島長野岡山山形大阪府第五、福岡神奈川茨城長崎滋賀開拓使宮城秋田島根第六、愛媛福島岐阜埼玉第七、群馬大分熊本〔栃木〕熊本界〔堺か〕青森鹿児島和歌山第八、山梨岩手高知県第九等、なり。而して其第一と第九とは三十と一との割合にして、第二と第九とは七と一との割合なり」（398号：1877（明治10）年1月4日号「論説」欄）。
- 15 「又試みにその各宗各派を以て之を計算するに真言宗第一、曹洞宗第二、真宗第三、浄土宗第四、日蓮宗第五、天台宗第六、臨済宗第七、時宗第八、融通念仏宗第九、なり。而してその第一と第九とは六十と一との比較なり」（398号：1877（明治10）年1月4日号「論説」欄）。
- 16 数値は「仏教各宗派寺院僧侶総数一覧表」（小林皆真『教学者必携 上巻』聖明堂, 1887.11）より。数字の典拠は『令知会雑誌』（明治19年5月21日号）に掲載された「明治十七年八月内務省ノ取調」である。
- 17 「○新聞雑誌配布高 昨年十二月中警視庁に届出てたる東京府下の刊行に係る新聞紙雑誌配布高は左の如し」『官報』1889（明治22）年2月14日付。
- 18 この表中、『日本之教学』のみが保証金不要雑誌（他は全て保証金を要する新聞雑誌）。
- 19 『令知会雑誌』は、令知会の機関誌で、1884（明治17）年4月に創刊され、1892（明治25）年2月、95号まで刊行された。96号（1892（明治25）年3月23日）から『三宝叢誌』となり、344号（1912（大正1）年11月28日）まで刊行された。なお、2017年に不二出版より復刻版が出ている。

令知会は、1884（明治17）年2月1日に発足した仏教結社で、発足にあたって島地黙雷が中心的な役割を果たした。特定の宗派によらない通仏教的な結社を標榜して出発したが、当初は真宗の本願寺派と大谷派を中心とし、後に本願寺派が中心となったという（中西・近藤編, 2017、参照）。
- 20 『能潤新報』は、1885（明治18）年9月に創刊された『能潤会雑誌』を前身とし、1888（明治21）年7月に『能潤新報』として改題されている。更に、1889（M22）年2月に梶山順がこれを引き継いで『仏教』と改題した。
- 21 『教学論集』は、1883（M16）年10月に創刊され、77編（1893（明治26）年3月）まで刊行された。
- 22 蘆津実全〔1850～1921〕。号は石蓮など。和歌山に生まれ、14歳で得度（天台宗）。1875（明治8）年、萩野独園を師として禅を学ぶ。1881（明治14）年、縮刷蔵經の校正に従事。1890（明治23）年、仏教各宗綱要の編集に携わった。1893（明治26）年、シカゴで開催された世界宗教会議に天台宗の宗務総長として出席。1898（明治31）年、臨済宗に転じ、1903（明治36）年に永源寺派管長に就任。1912（明治45）年に三教会同に参加。
- 23 養鷗徹定〔1814～1891〕。浄土宗僧侶。号は松翁、杞憂道人など。1868（明治1）年、諸宗同徳会盟に参加。1872（明治5）年、浄土宗初代管長。1874（明治7）年、知恩院住職。
- 24 井上甫水「余が疑団何れの日に解けん」（1749号、1884（明治17）年10月16日）。この論説が『真理金針』の初編の冒頭となる。なお、『真理金針』が『明教新誌』上で連載されていたことは三浦節夫〔2005〕

が指摘している。

- 25 「維新期の教団仏教は教部省令で天台宗・真言宗・浄土宗・臨済宗・曹洞宗・黄檗宗・真宗・日蓮宗・時宗・融通念仏宗・法相宗・華嚴宗の一二宗である」〔吉田, 1998:82～83〕。律宗はこの時期真言宗に含まれており、少し時代が下って1900（明治33）年に独立することになる。
- 26 真宗大谷派の機関誌は、『配紙』（1871～1884）、『本山報告』（1885～1893）、『本山事務報告書』（1893）、『本山事務報告』（1893～1897）、『常葉』（1897～1898）、『宗報』（1898～1901）、『教学報知附録宗報』（1901）、『宗報』（1901～1925）、『真宗』（1925～）と続いていくという。
- 27 1884（明治17）年8月11日に出された太政官布達十九号によって、教導職が廃され、各教団の取締が管長に委任されることになった。
- 28 一例として、反省会（結成1887年）から経緯会（結成1893年）を経て『新佛教』（1900～1915）を出すことになる新仏教徒同志会（結成1899年。結成時は仏教清徒同志会）へと繋がっていくような仏教改良運動の潮流を想定することができる。
- 29 目次に登場するのは、巴江堂主人「新仏教に付きての余輩の考」（「寄書」欄『明教新誌』2428号：1888（明治21）年9月16日）のみである。これは水谷仁海『新仏教』（1888）を批判する寄書であった。